

リレーしようよ！

保育の視点②より

自分のやりたいことを選び、

一人でも仲間とでも遊びに取り組み満足感を得る

天気の良い日は風が爽やかで、庭に出ているととても気持ちが良い季節です。この季節の中、私は、子どもたちと一緒に体を思い切り動かし「あ～、きもちがいい」と感じたいと思い9月10月を過ごして来ました。ホイホイ体操・ダンス・かけっこ・ドッジボールなどを組み入れながら、子どもたちは毎日のように「きょうのうんどうかい」を繰り返しています。保育者の思いの中では2学期が始まった頃より「この秋には年長組全員でのリレーを楽しみたい」と考えていました。一人でのかけっこは違う、仲間と一緒に気持ちになってゴールをするリレーの体験を、どの子どもとも分かち合いたかったからです。

9月中はクラスの集いの中で2チームに分かれてリレーをしていたのですが、10月に入って初めて、そら・はやし合わせて黄・青・赤・緑の4チームでリレーをしました。スタートラインに立つのは4人です。リレーの前に「よーし！はしるぞ～」と声を上げている子どもも多くいました。「よーい、ピッ！」と笛の合図でリレーが始まると、バトンの受け渡しのところで、誰からバトンを受け取ったら良いか分からなくなったり、バトンもらったものの走り出すのを忘れてしまったり、気が付いたら黄色チームの子どもがスタートラインに2人居たり、赤チームの次に走る子どもがスタートラインに居なかったり…。それでも何とか4チームがゴールしたのですが、子どもたちの顔を見ると、「ゴールしたのかなあ？」という顔をしている子どもが多くいました。私は、まだまだリレーの楽しみ方も習得していないし、チームの意識も育っていないことを感じました。そして、これから回数を重ねるうちにチームになっていくことが楽しみになりました。チーム分けは、ジャンケンで決め、その場で決まった仲間とチームを組み、リレーをします。

庭でのリレーの他に、カバ公園へ行って、幼稚園の庭のトラックよりも少し広めのトラックを描いてのリレーもしました。段々に、子どもたちの様子が変わってくるのが分かりました。誰からバトンをもらって、次は誰に渡すのか、当事者だけでは無く、チームの子どもたち皆が把握するようになりました。あわててスタートラインに立とうとしてしまう子どもに「まだだよ！」と声を掛けたり、バトンの受け渡しの時に、「〇〇ちゃん！はいっ！」と声を出しながら渡したり、走っている子どもに「△△ちゃん！△△ちゃん！」と声援を送り合ったりしています。ゴールして、順位の発表をすると、やはり最後になったチームは悔しく、下を向いてしまうので

すが、「でもさ、みんなよく走ってたよ。ね?」「うん、そうだよ」と励ます姿もあります。

Aちゃんは、皆の前で何かをする時ドキドキしてしまうことのある子どもでした。リレーも最初の頃はとても緊張していました。しかし、回を重ねるごとに、大きな声で仲間を呼ぶようになってきました。やがて、リレーのスタート前に「ねえねえ、私さ、一番最初に走る人になりたい!」とチームの子どもたちに話すほどになりました。ある日 A ちゃんがトップバッターを名乗り出ると「あ、ぼくもしたい」と、何人かの子どもも手をあげました。そこでジャンケンをすることになりました。ジャンケンをすると、Aちゃんが勝ちました。「やったー。走りたかったんだ」とAちゃんはぴょんぴょんとジャンプをして喜んでいきます。スタートラインに立ったときのAちゃんは、前を見据えて腕をかまえ、スタートの合図を待っています。真剣に走り、走り終わると大きな声で仲間を応援します。リレーが終わるとAちゃんは「あ〜、リレーたのしー」ととても満足した顔をしていました。

リレーを通して、個々の中に体を思いきり動かすことや、走る喜びが育っているのと同時に、意欲や一生懸命さ仲間意識などの芽が育てられています。

原町聖愛保育園の友達へどんぐりを届けよう

東洋英和女学院同窓会では学院と東洋英和楓の会の協力を得て、『東洋英和福島の子ども支援プロジェクト』が立ち上げ、東日本大震災で被災した福島県の子どもたちの事を覚えて活動をしています。昨年度よりかえで幼稚園もつながりをもたせていただいている原町聖愛保育園では、原発の影響を受け、まだ外遊びを制限されている状態です。昨年度、年長組の子どもたちは、その子どもたちのために、どんぐりを集めて送り、そこから交流が始まりました。そのことを引き継いで、今年の年長組の子どもたちもまた、原町聖愛保育園の子どもたちのために、どんぐりを集めて送ることにしました。

気持ちよく晴れた日に、カバ公園や菅生緑地へ行ってどんぐり拾いをしました。カゴを2つ持って行って、その1つには自分たちの分、もう1つには原町聖愛保育園の子どもたちの分のどんぐりを集めることにしました。子どもたちは、公園のあちらこちらでどんぐりを拾っています。「先生、こーんなに小さなどんぐりがあったよ」「緑色のどんぐりなんだけど、しましまの模様があるよ」と、拾ったどんぐりを見せに来ます。Bちゃんは、ひろった緑色のどんぐりのうち、2つを自分のためにスモックのポケットの中へ、3つを聖愛保育園の子どもたちへ、1つを年長組の子どもた

ちの分へカゴの中へ入れました。「もっと探して、保育園の子どもたちの分を集めなくっちゃ」と、何度も何度も拾いに出かけて行きました。

2つのカゴの中身を比べると、自分たちのために集めたどんぐりはほんの少力で、その何倍ものどんぐりが原町聖愛保育園の子どもたちのために集められていました。どんぐりは一度冷凍をし、虫が出てこないようにし、それから乾かします。子どもたちはひびや割れ目のあるどんぐりを選び分けて、傷のないどんぐりを届けてあげられるように準備をしています。「このどんぐり使って、何か作るかな?」「ネックレスとかコマとか作るかな?」と話をしながら選び分けをしている子どもたちです。また、贈り物の中に、子どもたちが好きになっている、針で画用紙に糸を縫っていった刺繍カードも添えて送ることにしました。自分たちが楽しくできることで誰かを喜ばすことができることは、恵みです。喜びを逆にいっぱいいただいている子どもたちです。



私たちは、森で遊び、木の実や木の葉を存分に手に取ることが出来ます。同じくらいの年齢の子どもたちの中に、そのことがなかなか出来ない子どもたちが居て、先生方と共に工夫しながら遊んでいるもことを覚え、子どもたちと祈り合って過ごしていきたいと思っています。

(鳴原 百合)